



寺口麻穂
**ドギー
パラダイス!**

犬と人間の快適な生活

第19回

ピットブル⑤

在米22年。かつては人間の専門家を目指し文化人類学を専攻。2001年からキャリアを変え、子供の頃からの夢であった「犬の専門家」に転身。地元のアニマル・シェルターでアダプション・カウンセリングやトレーニングに関わり、個人ではDoggie Project (www.doggieproject.com) というビジネスを設立。犬のトレーニングや問題行動解決サービスを提供しつつ、13歳になるピットブル、ジュリエットとニュージャーシーで楽しく生活中。ご意見・ご感想は：info@doggieproject.com



てらくちまほ

これまで5回にわたってシリーズでお送りしてきた「ピットブル」。締めくくりは、ピットブルをこよなく愛する有名人を紹介しながら、この犬種の魅力をたっぷりお話ししたいと思います。

セシブ界のピットブル

かつては、「子守りにぴったり」という意味で「ナニー・ドッグ」というニックネームさえ持っていたピットブル。戦前の人気テレビ番組「アワ・ギャング」(リトル・ラスカルズ)という映画版も有名で、子供たちと並んで写っているひょうきんなピットブル「ピーティー」の写真を見たことがある人も多いと思います。ピーティーを演じたフレンドリーでのおんきな犬は、アメリカン・ケネル・クラブに登録された血統書



セレブピットを目指す(?) 筆者の愛犬ジュリエット。芸者に扮してパチリ

付きの純血ピットブルでした。

ローラ・インガルス・ワイルダーの自伝的小説「大草原の小さな家」で一家と一緒に西部へ旅をした犬もピットブルでしたが、テレビ化にあたっては他の犬種が起用されたようです。

ピットブルを飼った有名人といえば、ヘレン・ケラー、トーマス・エジソン、アメリカ大統領のセオドア・ルーズベルトとウッドロー・ウィルソンがいます。現代のセレブでは、歌手のマドンナやピンク、俳優のブラッド・ピット、マイケル・J・フォックス、ジェシカ・ビールなどもピットブルの飼い主です。

またテレビドラマ「グレイズ・アナトミー」でお馴染みのキャサリン・ハイグルが最近、お母さんが創設した動物救護団体を通して、足と口をロープで縛られ身動きが取れない状態で泥地に捨てられたピットブルを助け出したというニュースもありました。ここに挙げたのはほんの一部ですが、私と同じように「ピットブル命」と宣言するセレブが多いようです。

この連載でも何度か紹介しているカリスマ・ドッグトレーナーのシーザー・ミランの右腕は、一代目「ダイー」も二代目「ジュニア」もピットブル。シーザーのドッグ・センターは彼が愛するピットブル

で溢れています。ケーブルチャンネル、アニマル・プラネットの「ピット・ボス」や「ピットブルズ・アンド・パロリーズ(仮出所者)」は今や人気番組になり、後者は先日行われたリアリティー番組の式典で大賞を取っていました。

みんな病みつき

ピットブルを一度飼った人は「病みつき」になるといいます。シエルターでもスタッフやボランテアの間で一番人気の犬は常にピット。正直なところ、ボランテアを始めるまではピットブルが怖いと思っていたという人たちさえ、いつの間にかピットに首つ丈。私が「シエルターの貴婦人」と呼んでいる年配女性たちも、いかつそうなピットブルにキスをしていて、微笑ましくなっています。

ピットブルの何がそんなに魅力なのか? それは彼らの人間への一途過ぎるほどの愛情かもしれせん。気取ることなく、出し惜しみせずにつづけてくるあの愛情の深さは、ピットブルの飼い主だけが味わえる醍醐味でしょう。それに天下一品の「コメディアン!」とにかくサービス精神旺盛で、人間を楽しませたくて仕方ないようです。このような「人間命」「飼い主のためなら何でも」という性格と、痛み知らずな強靭さ、さらに打たれても頑張り続ける根性がピットブルの魅力なのです。でも、その特性を悪用して、闘犬という残虐な行為で荒稼ぎをする醜い人たちがいます。この間ビジネスが一日も早く撲滅され、世界のピットブルが彼らの特性を心から愛しむ人となつてほしいと願ってやみません。

さて、次回は犬の飼い主の掟「犬の十戒」を紹介します。すでに犬を飼っている人も、これから飼おうかと考える皆さんの学ばることが一杯。どうぞお楽しみ。

お薦めピットブルサイト
www.badrap.org
http://www.pbrc.net/